

ところがただそれだけでは永久に、我々が死んでも広宣流布にならないかというところ、そうではない。その大きな流れの中に入っている間は、立派に広宣流布を完成しているのですから、一家の内でもそうです。初めはお父さん、お母さんがやっていた子供はやらぬ。それは流行の姿で、子供がみんな信心を始めたならば一家広宣流布の姿である。そうなるべく我々が努める。その広宣流布になった時が、たとえ世界の隅々までいかなくても、今日この状態に於いて広宣流布が出来ている。こう考へても差し支えないわけだ。今、我々は幸いに正法を建立してあります。この十月に完成する。それは現時に於ける広宣流布の姿に於て、王仏冥合の姿に於て、あの正法堂が建立して事の成壇として立派に成り立つのであります。それを我々が願ってあります。またそうあるべきでございます。そこに今の転輪聖王の出現ということが大聖人様が理想とされてお説きになっております。」

資料③ 日達上人御講義「法蓮鈔」(大日蓮 昭和48年6月号)

「この人間の中で、最高の人というのは、転輪聖王だと。転輪聖王がこの世に出現する時は、大海に優曇華の華が咲く。また大きな木が生えて、花にはみな立派な実がなる。この転輪聖王の上の人を金輪聖王といひ、金銀銅鉄という四種類の、四種類といつては申し訳ないけれども、四つの転輪聖王が、鉄輪聖王、銅輪聖王、金輪聖王がいる。で、広宣流布の時は、この金輪聖王が出現するのである。だから広宣流布の時は、この金輪聖王が出現して、世の中は平和になる。すべての人をこの平和に導くんですから、いかなることも自由自在である。妨害する者も信服し、自ら十善を行じて大果報を得ておる。そこで妙法蓮華経はいつ広宣流布するんだという問題が起きる。最後の本当の広宣流布の完璧の時はこの金輪聖王の出現にある。その時に戒壇の本尊を中心として、みな世界平和を祈り、我此土安穩、この土は常に安穩であっていただきたい。それが法華経の信心である。我々の願ひである。妙法蓮華の根源である。広宣流布のその時の王様はどうかという王様かそれはわからんけれども、名前は金輪聖王という資格において出現しなければならぬ。」

資料④ 日達上人御講義「法蓮鈔」(二) (日達上人全集第二輯第四巻)

「まず、我々の人間界としては転輪聖王というのが最高の人である。広宣流布の時はどういふ時代になるか。広宣流布の時の為政者の総師はまた天皇、王様でもない、王様は金輪聖王、転輪聖王の内のもっとも上位の金輪聖王である。この人の出現する時に広宣流布になるんだということが説かれております。だから広宣流布になる時の為政者は、金輪聖王だということになるんだ。金輪聖王は自分から信心して、人をも教化していくからそういうことになります。そういう転輪聖王が人間界では第一である。」

資料⑤ 日達上人御講義「法華初心成仏抄」(昭和五十五年十月八日・信正寺新築落慶入仏法要の砌)

「また(女人は)「転輪聖王」にもなれませぬ。「転輪聖王」とは、ある時期に出現する非常に立派な王様です。以前、先師・日達上人が広宣流布の時に、やはり「転輪聖王」が出現するということをおっしゃってあります。下種仏法の意義のうえから「転輪聖王」という立派な方が出てきて、広宣流布が日本のみならず、本当に世界中に実現するということ、我々は信ずることが大事であると思ひます。」

資料⑥ 日達上人御講義「撰時抄」(昭和五十八年九月十六日・本覚寺新築落慶法要の砌)

「次の「夫れ麒麟の尾につけるだにの一日に千里を飛ぶ」といふ、転王に随える劣夫の須臾に四天下をめぐるといふをば難ずべしや疑うべしや、豈自歎哉の釈は肝にめいずるか」といふのは、法が勝れておるが故に、したがってまた人が勝れるということの譬えとされるのであります。この「転王」といふのは転輪聖王のことですが、転輪聖王思想は昔からインドにおいてあるのです。必ず今に素晴らしい大国王が生まれてくる。しかも、それは伝説化されてしまつて、この転輪聖王という方は自在無礙の徳と力を持っておるが故に空中を飛ぶといふのです。ですからここに「須臾に四天下をめぐるといふ御文がおりますが、軍隊を進めるときに、普通だつたら地面を歩いて行くのだけれども、この転輪聖王という方は空中を飛んで行くといふのです。そういうふうな早く移動して、あらゆる所の悪い王を平らげるという意味であります。」

この転輪聖王が必ず今に出て、本当に幸せな国土を築いてくれるという思想は昔からあるのです。それはまた人類が自らの願望であります。それに対して、悪国、悪王といふのがまた、これはきりがない。今でもいくつでもあります。名前も違つてはいるけれども、世界や日本の政治家の人達のなかに、そういう意味での、幾分、幾分の悪王が多い。結局、これは何かといふと、民衆のためより自分のために色々なことを行うことが中心になる。したがって、だんだんと自分はお金持ちになるけれども、ほかの人は貧乏になり不幸になつていく。これはもう自然の道理であります。今、世界の国々のなかで、聞いた話によると、そういう政治を執るところの人が自分自身の利益のために色々なことを行ひ、その一族はたいへん富裕になつておるといふ例が多々あります。そういう国から見るとこれはいけないことだけれども、日本の国の首相がたかだか数億円ばかりのお金の問題で裁判にかかるなどということ、びっくり仰天するようなことらしいのです。たつたそればかりのことです。そんなことになるのかというわけです。だから日本の国は、それから見ればまだ良いとも言える。それぐらい世界はひどいのです。

ですから、世界の姿を御覧なさい。多くの国の人々が、実に貧困に苦しみ、不幸のどん底に喘いでいる人が世界に多いのです。日本はそれから見れば最高の良い状態とも言えます。これは、なぜ良いか。大乘の国

B-5

だから良くなつてきているのです。法華経が昔から弘まっておるが故に日本の国がこれだけ、色々な意味において良くなつてきているという因縁が存すると思ふのであります。色々なことを言ひましたけれども、この正義と幸福をもたらす転輪聖王が必ず将来出現するということが、これはまた仏教の思想にも受け継がれております。だから我々も、正しい法をもつて正しい弘通をし、正しいことをどんどん行って増上縁を増していくならば、必ず今に転輪聖王のような立派な方が出現し、その絶大な力をもつて本當の幸せな世の中が現出するといふことが、実際に仏教の上からも説かれておるといふのであります。そういうことができようか、疑うことができないか、いや、疑うことはできないかの仰せです。」

資料⑦ 日達上人御講義「観心本尊抄」(昭和六十二年十月九日・清光山正啓寺法要の砌)

「次の「当に知るべし此の四菩薩折伏を現する時は賢王と成つて愚王を誠責し損受を行ずる時は僧と成つて正法を弘持す」の文において四菩薩の行相を御指南であります。ここに折伏と損受という化導の方軌の二面が挙げられております。折伏、折伏といつても、折伏のみに執られた折伏は本當の折伏ではない。損受、損受といつても、損受だけに執られた化導は本當の化導ではないのです。損受の意味と折伏の意味、これを本當に正しく掴んで、そして如実に衆生を正しく導くところに、損受、折伏、時に適うといふことが一番大事なことなのです。しかして大綱においては未法は謗法の時代で下種の時です。折伏を大綱とするのであります。折伏の教法中の法華経と爾前経とを比べると、爾前経は損受を説いたといふこと、なせならば方便の教えだからです。なせならば、病に病に薬を与えるのである。しかし病に病に薬を与えるのが、真実の教えを説く場合にはどうしても折伏が大切なのです。方便の教えを説いて、相手に病に薬を与えるときには損受で間に合う。その損受が必要なきもあるのです。しかしまた真実の化導には折伏が大切である。未法は折伏を基本としつつ、損受、折伏、時によつて正法の弘通を行へば、四菩薩が未法に出現するといふことは、大聖人様がその一番根本の上行菩薩様としてのお姿をもつて御出現をさばされた、その御内証は久遠元初の御本仏様として大法を顕示された。ただし大聖人様の化導は、釈尊一代の化導のなかに方便と真実とがある故にこれに迷う者があるため、根本の法体の上から真実の相対をもつて方便の教えを折伏とさばされるのです。ですからそういう意味において法体の折伏をもつて本當の法体を顕されるのであります。」

しかし法体の折伏に對し、転輪聖王の如き國王あるいは大勢力者の出現と相俟つて、そういう在家の立場から悪人、悪支配者を懲らしめ反省せしめる如き實際の折伏といふ姿があります。これは現実の社会や世界において、法の邪正を決するといふ形で折伏といふ姿があります。御文では僧の法体の折伏を化儀の折伏に對して四菩薩における「損受を行ずる時」とされ、國王の化儀の折伏を「折伏を現する時」と示されております。法体の折伏は既に大聖人の御出現によって確立され、あとは日興上人以下、僧宝による法持の折伏となり、法持の問題は國王による化儀の折伏です。これは大聖人御出現当時より現在、そして未来へ向かう時の流れのなかに正法を篤く信仰してその威光を顕し、法の威光を發揚するとともに、勧善懲惡の働きをなす大人格の出現であります。

それはその時、その時において色々です。ただし大慈悲が常に根底にあるのです。なにも國王の折伏といふから直ちに武力をもつて、言うことを聞かない者は死刑にしてしまふといふような意味でやることでは絶対にないのです。ただ正法受持の因縁と大法の功徳により智慧や慈悲が充満し、そういう意味において一切の民衆を救つていくような力をもつた人々、在家のなかからそういう人が現れて、その時に病に病に薬を与える、世界的な範圍において折伏する、あるいは僧として損受の形において一切民衆の眞の幸せのために法を弘め、その法に基づいて一切の民衆を導いていくといふ四菩薩行を常に我々は願ひ求むべきであるといふように、私は拝し奉るのであります。『地涌の菩薩の出現に非ずんば唱へがたき題目なり』(全集一三六〇頁)の文を拝する時、正法を受持する者はすべて地涌の菩薩でありますから、一人ひとり「此の四菩薩折伏を現する時は賢王と成つて愚王を誠責し損受を行ずる時は僧と成つて正法を弘持す」といふ御文を拝して、深く自他に對する正見をもつて進むべきだと思ふのであります。」

日米に咲いた古代の「蓮華」

今から四千年近く前のことである。一九五二年(昭和二十七年)、大聖人が立教開宗なされてより七百年の大聖節であった。

この年の夏、日本では、大聖人御聖誕の千葉の地で約二千年前の遺跡から発見された「蓮華」の種が、その長い長い眠りから目覚めて、うす紅の美しい花を咲かせた。有名な大賀ハスである。当時の大賀ハス話題であった。

それとちょうど同じころ、このアメリカ・ワシントン市の国立公園でも、数万年を経た「蓮華」の種が、うす紅の大輪の花を咲かせたといふニュースが、日本にも伝えられた。小さな記事であったが、恩師・戸田先生は見逃さなかつた。

戸田先生は、立宗七百年のその年に、東西でそれぞれ、何千年・何万年前の「蓮華」の種が開花したという事実を、大白法興隆の源流らしき瑞相ととらえられた。

(「今日明日」才52集)  
172.2.24  
NSA 30周年記念会